

国際基督教大学(ICU) 教養学部

ICUの教育の特色は、世界に羽ばたく「個」の確立をめざすリベラルアーツ教育の実践にあります。入学後、幅広い科目を学び、2年次の終わりまでに文理にわたる30あまりのメジャー（専修分野）の中から専門を決定します。



■大学生
遠藤翔さん



■先生
伊東辰彦先生



■卒業生
楠山麻衣子さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

ICUの特長を教えてください。



■先生

「ライタースペシャライゼーション (Later Specialization)」と呼んでいますが、受験生にとって一番良いのは専攻を必ずしも初めから決める必要がないということです。本学は2007年度まで6学科制でしたが、2008年度からアート・サイエンス学科に統合したのも「Later Specialization」の考え方に徹底する姿勢の表れです。多くの大学では大抵学部毎に決まったパターンのカリキュラムに従って勉強しま

すが、ICUの場合は自分の方向性を自分で確認する余裕があり、良い意味での冒険ができます。これは本学が掲げている、ある特定の学問領域にとらわれない「リベラルアーツ教育」というポリシーにもつながります。専門性を高めていくと同時に自分の領域以外の学問にも興味を持ち、常に連携した学びの姿勢を持つということです。

その考えがICUの「メジャー(専修分野)制」にも反映されているわけですね。

■先生

ICUでは1～2年次にリベラルアーツ英語プログラム(ELA)と、一般教育科目や基礎科目をとりながら、文系・理系を問わずに30あまりある分野の中から自分の興味と適性に合った授業を選択し、2年次の終わりまでにメジャー(専修分野)を決めていきます。そこで重要なのは自分で決めるということで、良い意味で迷いながら自分の目指すものを見つけていく作業をします。ほかの大学では入学の時点で学部や専門を決めて、それが思った通りだった方は良いですが、「あれ？」という人も中にはいますよね。再度受験し直したり、留年したりといったことは不可能ではありませんが、それには余計な時間がかかってしまいます。

もちろん本学にもすべてのメジャーが網羅的にあるわけではないかもしれませんが、一定の範囲内では自分の意思を反映することができます。18歳前後で自らの進む道はなかなか簡単には決まらないと思います。何かを選択するにあたっては、自分と向き合ったり、他人の意見を聞いて悩んだりしなければなりません。それはポジティブなことだと見極めながら、そこをもう一步自分で踏み込んで「自律的学修者」になる訓練をしていただくということです。

●大学生活について

ICUに入ったきっかけを教えてください。



■大学生

発端としては母が高校生の頃に留学していたこともあり、小学生の頃から母とアメリカの友人の家に遊びに行く内にだんだんと海外や英語に興味を持ち始めたことです。

中学校、高校で実際に英語を勉強するとますます英語に興味が出てきて、漠然と通訳の仕事にあこがれるようになりました。その時は「テレビでスターの隣にいる人」程度の認識で、まったく詳しくはなかったのですが、日本語と英語

のコミュニケーションの橋渡しができたらいいなと思っていました。

この理想をずっと持ちながら勉強していたので、志望校を検討する際にはおのずと英語に強い大学という絞り方になりました。中でもICUは、私の高校生の時の英語の先生が卒業生で、「ICUは人をつくる大学だ」というアドバイスがとても印象に残っています。自分のやりたいことがICUにあったことと、高校の英語の先生の存在が入学のきっかけです。

■卒業生

私は中学校と高校が一貫校だったので、基本的に自由な時間が多かったです。間に試験がなくて、どうしても中だるみの時期があり、おかげで勉強は遅れてしまったのですが、オーケストラ部に入って音楽を楽しんだり、アイドルをテレビで観てドキドキしたり多感な時期なので、いちいち色々なことに感動していました。

また、キリスト教の学校だったので、毎日賛美歌を歌い、クリスマスでは礼拝があり…と音楽が身近にあり、宗教音楽にも興味を持つようになりました。

その内に「感動する」ということが、どういうことなんだろう？

人を感動させる「芸術」ってどういうものなんだろう？

「何かを信じること」と芸術(音楽)の関係ってどんなものだろう？

というようなことを漠然と考えるようになり、大学では音楽学の他、美術や哲学、宗教などを幅広く学べるICUを志望しました。

■先生

医者になるなど確固たるものではないけれど、自分なりに何かを考えていて、でも、その先の可能性をもっと探りたい。そんな人がICUに向いているのかも知れません。

■卒業生

そうですね、決める必要はないと思います。

■先生

決めていても構いません。ただし、決めている学生には「それは違うかもしれないよ？」と言うのがICUです（笑）。「音楽学がやりたい」と学生が言うと、「本当にいいの？ほかにあるのでは？」という感じです。

■大学生

学んでいるうちにどんどん自分が分からなくなりますね（笑）。

ICUは自由度が高いですが、授業の選択で迷いはなかったですか？

■大学生

通訳に関係する部分では予想通りの授業がありました。

ただし、ICUの授業を受けるとそれまでは「スターの隣にいる人」という認識だった通訳という職業やその専門性をどう捉えるかが、ある意味で迷いになりました。

ICUでは様々な語学能力を持った学生がいて、日英バイリンガルの学生とも一緒に通訳の授業を受けます。バイリンガルであれば授業も簡単だろうと思っていましたが、実はそうではありませんでした。頭が追いつかない、スキルがないと日本語が聞こえても英語で話すことができませんし、その逆もそうです。そういう意味では言語だけがコミュニケーションの手段ではなく、言語=コミュニケーションではないなと感じました。

また、通訳には通訳の技術がありますし、機械翻訳や自動翻訳が発達する世の中での存在意義のような悩みがあることも知りました。中には「通訳は何も伝えられない」とまで言っている人もおり、通訳の存在やコミュニケーションはどうしたら本当に成立するのかと考え出してしまいました。

ですが、自分が最初に考えていたものが壊され、平たくされて、それが再度自分で練り直す良い機会になりました。これは通訳の勉強を通して感じた部分もありますが、ICUの特長である、どの授業でも履修できるシステムが関係しています。「もしかするとこの授業は自分の将来に関係してくるのでは」と、広く多面的な視点で物事を捉えられるようになりました。

■先生

通訳は言葉をそのまま訳すのではなく、“この人は何を伝えたいか”を掴みながらそこを拾って言葉にしていきます。ですからその「何を」を掴む力がなければ、それこそ自動翻訳になってしまいます。

■卒業生

高校時代には「ICUは英語が有名」というイメージがとてもありました。実際に入学後もしっかりと英語の授業がありました。でも、改めて振り返ってみると実は英語を最重視している大学ではなかったな、というのが最終的な感想です。

もちろん、ICUで培った英語力は仕事の上でも役に立ち、感謝しているのですが…。

「英語」を学ぶというより、「英語を学ぶこと」で、「言葉を使う」ことを学んだ気がします。

何かを考える時、学ぶ時の土台となるのが言葉です。それをどうやって積み上げていくのかマラソントレーニングのように指導されました。



今、実学志向ですぐに役に立つものを学ぶ傾向があると聞きますが、ICUは180度逆だと感じます。「そんなこと考えないでいいから、まずは自分の興味のあるものを思いっきり掘みに行け！」と。学生時代の4年間で、何かの即戦力が備わった、というより、自分の土台みたいなものが形作られたというイメージです。

ICUの先生と学生はどのような距離感でしょうか？



■先生

対話を重視しています。君はどう思うのかという時に、突然英語で「How do you think?」と言われて必死に言葉を紡ぐようなコミュニケーションをあえて取ります。語彙がそれほどないため学生は焦ります。でもだからこそ外国語で言わせることには意味があります。日本語も重要ですが、あえて不得手な言葉で言ってみると、一生懸命考えなければ出てきません。こうする

と本来の母国語の意味も出てくると思います。日本語はできて当たり前と思っていると、実は意外に穴があります。言葉を使うという訓練を再度、母語ではない英語でしてみると、より良く自分の思考回路が分かってきます。絶えず比較対照しながら可能性を見つけることが大切です。

■卒業生

英語と日本語の両方があるのは悪くないことかもしれませんね。先ほど遠藤さんも言っていました、スキルがないと日本語が聞こえても英語で話すことができない。使う言葉が、思考回路に影響する部分もあるから、二つの言葉で考える事より深く考える事ができるかもしれない。

■大学生

母国語が影響して考え方が構築される部分があるので、そういう意味では日本語が得意な人は極端に言えば日本語脳だけで生きてきています。

ICUには英語の方が得意な人もいますし、そういう学生はしばしばまったく逆の視点から同じ物を見えています。それを授業でぶつけ合って、話し合うことに意味があると思っています。そのぶつかり合いの中でも答えは出ませんが、答えを求めるよりも話し合うことで、もう一度自分の考えていることを考え直して見ることが出来ます。自分があまり得意ではない言語で考えて結論を出したらどういう風になるのかということが大切だと思います。

お二人もおっしゃっているように「何かにつながる」「就職や仕事につながる」ことではありませんが、何かにつながっていて、そういう部分を学ぶことができるのがICUの良さであり大切な部分ではないかと思っています。

■卒業生

それが「人をつくる」ということですね。

大学で受けたおすすめの授業は何でしょうか？

■卒業生

「Japanese Music」は日本音楽の科目ですが、授業は英語で行われました。日本音楽の歴史を学びますが、他言語を使うことで少し俯瞰した視点があり面白かったです。

■先生

日本の音楽をあえて英語で話す授業です。

日本音楽には日本語として覚えている用語がありますが、それを英語で言ってみると思いもよらない感覚になることがありますし、その逆もあります。

自分では分かっていたつもりですが、英語で言ってみると妙に納得するような感じ。知識の海

の中で埋没してしまうと、その中でもがくことになってしまいます。知識は重要ですが、そこに少し距離をとって俯瞰すると高次元なところから見るができる面白さがあります。

大学生活で力を入れていたことはありますか？

■大学生

2011年頃にできたICU Brothers & Sisters (IBS) という履修相談などを行う団体に2年次から現在まで所属しています。

メジャー制度が始まって以来、選択に悩む学生が増えていて、それを教員や職員がアドヴァイジングによってフォローしていますが、私たち学生側からもサポートする団体です。大学にある部署の直属団体なのですが、メンバーの選考には面接がありますし、お給料をいただきながらやっているためサークルとは少し違います。

私は通訳を目指していたこともあり、ICUには英語を学びたいと思って入りました。しかし、それ以外に何をしたらよいかということは考えていませんでした。ICUに入学したものの、身近に相談できるような知り合いの先輩がおらず、入学時にとっても悩んでいたところ、IBSに入っていた先輩が相談に乗ってくれたことがメンバーになったきっかけです。自分のほかに、例えば地方出身者で困っている学生がいれば相談に乗りたいなという気持ちでした。

●就職活動、仕事について

現在のお仕事はどのようなことをされていますか？



■卒業生

日本放送協会 (NHK) で、ディレクターとしてテレビとラジオの番組を制作しています。

私は音楽・伝統芸能番組部という能や歌舞伎などの日本の伝統芸能やクラシック音楽やバレエなどの番組を作っている部署に所属していて、特にクラシック音楽番組を中心に制作しています。「クラシックってちょっと難しそう…」という人に「こんな音楽もすてきですよ」「こんな風に聴いたら面白いかも知れませんよ」と、新しい扉を開くような番組を作ろうと試行錯誤しています。

オペラと恋愛のぶっちゃん話を結びつけた“トーク番組”や、子供に音楽を楽しんでもらう“体験型音楽番組”、アマチュア音楽家がプロのオーケストラと夢の共演を果たす番組など色々作ってきましたが、今は「ららら♪クラシック」という名曲を色々な角度から徹底的に紹介する“名曲ガイド番組”を制作しています。

実は人間臭い天才作曲家のエピソードや、プロの作曲家が解説する名曲に織り込まれたスゴ技などを紹介して行く番組です。

デスクという立場で、全体のコーディネーターというか皆のお手伝い役みたいなことをやっています。番組全体の方向性や、内容のたたき台を作るほか、担当ディレクターと一緒に、それぞれの番組の構成を練り上げたり、ナレーションのコメントを書いたり、はたまた出演者の楽屋の手配のような細かい仕事も…。

ちょっとしたことで番組がぐっと面白くなることもあるので、細かい目配りをする役目です。

「この曲はどこがすごいのか?」「この作曲家はどんな人なのか?」、ディレクターと共に音楽と格闘する毎日です。

同僚にはどんな方がいらっしゃいますか？

■卒業生

職員は1万人くらいいて、放送を出すための様々な仕事をしています。ニュースなどの取材をする記者、映像や音声や照明、ビデオエンジニア、電波の送信などの技術者、編成の担当者、アナウンサー、営業、総務、そしてディレクターなど。

ディレクターは、番組の企画、制作をする職種ですが、政治番組、自然番組、生活情報番組、歌やコントなどエンターテインメント、ドラマ、子供番組など、本当に多様な番組を作っています。NHK というと「固い」イメージかもしれませんが、硬軟織り交ぜ（真面目な番組が多いかもしれませんが）実は民放より多種類の番組を制作していると思います。この多様性が NHK の特徴の一つだと思います。ディレクターの気風として、多様な価値観を大切にしようという雰囲気があると思いますが、ICU にも似ているかもしれません。それから、これも ICU に似ていると思うのですが、スペシャリストであり、ゼネラリストであることを求められる仕事です。

一つの番組を作る時には、徹底的に取材してそのテーマの専門家になることも、視聴者に伝えるための俯瞰した目を持つゼネラリストになることも必要なんです。ICU の目指す、広い教養と専門性の両立みたいな感じでしょう

■先生

それはリベラルアーツ的な、水平線と専門的な垂直線の交わりのようなものを感じさせますね。

就職活動はどのようにされましたか？

■卒業生

ICU の特長は4年間で専門的なことを奥の奥までやるというよりは、土台を作っていくという感じなので、専門的な部分は4年間では時間が足りません。私は漠然とですが大学院に行こうかなと思っていました。

ただ、就職の超氷河期だったこともあり、大学院を出た後の身の振り方を考えておかなければと考えたんです。そんな時に学生仲間が開いた勉強会に参加する機会があり、

そこで出会ったゲストに「NHK で音楽番組を作るのも面白いのでは」と言われたのです。

確かに NHK は音楽番組を作っていますし、音楽関連の仕事ができると思い受けてみることにしました。企業の様子もよく知らず、ぎりぎりに思い立ったためスーツもなく、筆記試験対策もなく、今思えば無謀な挑戦でした（笑）。筆記試験までに必死に勉強をしてなんとか受かり、その後の2次以降の面接で音楽関係の仕事をしたと話すと、偶然にもそういう人材が欲しかったようです。大学院にはいずれ通う事もできますし、せっかく合格したのだからと就職してみると、予想以上に仕事が面白く、今に至っています。

■先生

急いで準備をして受かってしまうところがとても ICU の学生らしいです（笑）。これも基礎ができているので、後から上積みできるということですね。

大抵のことは自分の思ったようにはいきません。もし自分の専門分野で失敗した時に、代替となる知識や経験があると強いです。



同窓の方はこういった職業に就いていますか？

■大学生

特定の企業や業種に多く就職することはないですね。

ある会社で定年まで勤めるというよりは、自分が何をやりたいかが重要でそれを変更しない方が多いかもしれません。自己実現のための仕事をしていて、でも違和感を持った際に、そこに留まるかそれとも違う道を進むかという選択肢があったなら、違う道に進むという方がICUの学生には多いのだと思います。

■先生

自己実現が重要で、その手段がたまたま違う仕事にあったということです。

ICUの学生は良いか悪いかは別にして個人主義です。集団でいるということもありません。自分ひとりで勝負するようなどころがあります。

● 5年後に向けて

将来の夢はなんですか？

■卒業生

職業人としては良い音楽番組を作ることには尽きます。音楽を伝える番組でも、実はナレーションなど言葉で伝える部分がとても重要です。そもそも音楽は言葉では伝えられないものですが、その音楽をあえて言葉で表現する…矛盾をはらんだ番組作りにやりがいを感じています。



失敗談なのですが、以前世界的な指揮者にインタビューをした時、「この音楽をどう捉えているか、どこが素晴らしいのか」とあれやこれや聞いてしまいました。その時、指揮者に「音楽はいいから、いいんだ。言葉にはできない」と悲しげな顔をされたのをよく覚えています。

その言葉にできないものを、どうやって伝えて行くのか。言葉と音楽のせめぎ合いを楽しみつつ日々やっています。

■先生

本質がなかなか伝わらないというのは教えていてもあります。そうした葛藤の中から良い言い回しや良い表現がだんだん磨かれていくのだと思います。それはとてもクリエイティブなことです。どんな仕事にせよクリエイティブな部分があるかどうかは、その人にとって生きる充実感につながるので、自分なりのクリエイティビティを追い求めて欲しいですね。

先生ご自身の夢はありますか？

■先生

私はもともと18世紀のハイドンを始めとした、西洋のクラシック界の作曲家について研究してきました。作曲家の作品だけでなく作曲者の人物像にも迫ることで、これまで常識とされてきた音楽理解を見直してみたいと考えています。

学生時代にハイドンで卒論を書いて以来、しばらくいろいろな他のことを研究しながら、音楽マネジメントの関連分野をやりましたが、最近ではやはりハイドンがどういう人だったのかを一般の人たちに伝えたいという思いが強いですね。

モーツァルトやベートーベンには情報がありイメージができあがっていますが、ハイドンは知ってい

るようで知りません。実は心の機微があり、作品もたくさんある面白い人物ですが、凡庸に見えてしまう人生なのでもったいないと感じています。

18世紀の音楽と今の音楽は違います。モーツァルト、ベートーベンが19世紀の音楽界に合致していますが、ハイドンの音楽観は18世紀のもので少し違っていています。18世紀後半の最高の音楽家はむしろハイドンで、それがなぜだったのかなど面白い要素があります。これは簡単には話せませんが、こういったことを伝えていきたいと思っています。

■卒業生

聴き方のポイントを知るだけできっと音楽の聴き方も変わってくるはず。モーツァルトも天才だったなどと言われてはいますが、実際は違います。

■先生

彼は幼い頃から英才教育を受けていてコソコソ型です。その分、教える側にまわった時にはうるさい先生です。多くの弟子を持っていましたが、規則と違うなどと執拗に直しており、そこに天才型の印象はありません。

音楽学の社会的意義は何でしょうか？

■先生

逆説的かもしれませんが「社会的にはさほど役に立ちません」、そして「答えがあるかも分かりません」…というものの、存在意義は何なのかということです。音楽がなくなると社会は未だかつてありません。音楽がなくなると物理的には生きていけるかもしれませんが、それは人間の本質的な部分に関わってくるものではないかと思えます。それを再確認することでもあります。



例えば音楽療法の話がありますが、認知症の人が歌を聴くと笑顔が出てしまうというのは驚くべきことだと思います。いくら薬を飲んでも効果がなかったのに、きっと心の奥の琴線に触れるものがあるのだと思います。それが何なのかは分かりませんが、皆でそういったものがあるよねと共有できることが音楽の良さです。

もう一つ例を挙げれば、パレスチナとユダヤは政治的には真っ向から対立していますが、若い人たちが一緒にオーケストラでベートーベンをやろうという試みがありました。両者にはやはりいろいろな軋轢があります。最初は練習もぎくしゃくしていますが、だんだんと楽しくなり、遂には相手に音を合わせようとしてきます。人間は合わせたい、共感を持ちたいという本能があるのでだんだん息が合ってきます。同じハーモニーを作る部分に音楽の不思議さや本質的なものが見えます。

●高校生へのアドバイス

高校生に進路選択のアドバイスをいただけますか。

■大学生

自分のやりたいことを高校生のうちから少しずつ考えておくことではないでしょうか。有名な大学に行くのが指針でも構いませんが、それ以上に自分のやりたいことがあってそれができる大学に入るべきだと思っています。自分のやりたいことを少しでも持っていることと、だからといって一つのことにとらわれないという意味で、周りの意見もしっかり聞くような両面が大切だと思います。

高校生が勉強を通して学ぶことの意義は何でしょうか？

■先生

高校生の勉強は、今は「理科です」、「社会です」という風に分断的に詰め込まれています。それを例えば、社会を理科の視点で考えたら、というように“つなぐ仕掛け”を作っていくことがポイントです。時事問題を英語でディベート的に述べてみるなど、今習っていることを言われたままに分断的に覚えているのではなく、応用的に自分でも横断的な仕組みを考えてみるのがいいのではないのでしょうか。そういう考え方のクセをつけておけば柔軟性が養われます。言われたままに枠を作ってそこに安住してしまうと、あまり伸びしろが期待できない気がしていますし、その枠が崩れた時に自分のやってきたことはなんだったのかと崩壊してしまいます。

●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

伊東辰彦先生

国際基督教大学 教養学部長

私立成蹊高等学校出身。国際基督教大学教養学部人文科学科卒業。ニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校音楽学部大学院修士課程修了。デューク大学音楽学部大学院博士課程修了。国際基督教大学助教授、准教授、教授（音楽学専攻）、同大学院教授（比較文化）、オーストリア・インスブルック大学音楽学研究所客員教授、立教大学経済学部兼任講師などを歴任後、2013年から現職。



■卒業生

楠山麻衣子さん

NHK（日本放送協会）制作局ディレクター（2015年度取材当時）

私立女子学院高等学校出身。国際基督教大学教養学部人文科学科卒業。現在は制作局 音楽・伝統芸能番組部に所属。これまで「N響アワー」「名曲アルバム」「クラシック倶楽部」「あなたの街で夢コンサート」などクラシック音楽番組を中心に制作してきた。現在は「ららら♪クラシック」（Eテレ 毎週土曜 21:30 放送）を担当。



■大学生

遠藤翔さん

国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科4年生（2015年度取材当時）
私立南山高等学校男子部出身。中学生の頃より通訳にあこがれ、現在は主専攻として、メディア・コミュニケーション・文化（MCC）を、副専攻として経営学を学び、通訳や翻訳におけるコミュニケーションのあり方を追究している。